

# 転倒を検知するとサポートセンターに自動通報！ 防水仕様で入浴時も安心できる緊急通報サービス

NPO法人パオッコ 〓 離れて暮らす親のケアを考える会 太田差恵子

東京消防庁の資料によると、高齢者の事故の中で最も多いのが「ころぶ」事故で、毎年3万人以上の高齢者が「ころぶ」事故でケガをして救急搬送されています（東京消防庁管内）。その数は年々増加し、平成24年には4万人を超える高齢者が救急搬送されました。

事故の発生場所では、「住宅等居住場所」が最も多く半数以上を占めています。また、高齢者の事故の中で最も重症度の高い事故が「おぼれる」事故で、平成24年は575人が救急搬送。内、入院が必要とされる中等症以上と診断された割合は97%で

した。発生場所の9割は自宅の浴室です。一般的に、高齢者がけがで入院すると、その後の生活の質は大きく制限されてきます。大きなけがには特に注意が必要が必要です。

## ●96%の確率で転倒を検知する「フィリップス緊急通報サービス」

事故の発生を予防するために、家屋内に手すりを付けたたり、段差を解消することも大切ですが、スムーズに通報できるようにしておくことも重要だといえるでしょう。

「フィリップス緊急通報サービス」

「ス」は、救助やサポートが必要などときに、身につけているペンダントのボタンを押すことで通信機を通じていつでも安心サポートセンター（コールセンター）を呼び出すことができます。システム。通信機本体はハンズフリーで話すことができます。

また、ペンダントは複数のセンサーで転倒・転落を自動で検知（検知率96%）し、自動で同センターに通報することができます。ボタンを押せない状況の時も安心です。浴室に持ち込める防水仕様となっており、つけたまま入浴できるのもうれしいポイントです。

サービスを利用するに当たっては、緊急時に加入者の元に駆けつけられる親族や近隣住民などを「協力者」として登録しておきます。鍵は「協力者」に預けるか、暗証番号を使って開閉する「鍵専用の保管庫」を敷地内に設置して利用。

そして、緊急通報や転倒検知があると、安心サポートセンターが状況確認をした上で「協力者」に救助を依頼（協力者に連絡が取れない場合、かつ、協力者に連絡が取れない場合で、消防より現地での状況確認を求められている場合には、有料でフィリップス社員が駆けつけます）。必要に応じて、救急車を要請することになります。

離れて暮らす85歳の母親にサービスの利用を提案したという女性は「最初は、自治体の緊急通報システムを検討しました。けれども、実家はIP電話だったので導入できず、『フィリップス緊急通報サービス』を選びました。結果、転倒した際に自動



(通信機とペンダント)



通報されることと、入浴中も利用できることで安心感が高まりました。ペンダントも小型でシンプルなデザインなので、母は、1日中、付けてくれています」と、話します。

### ●ケアマネジャーにも状況報告

同社への問い合わせは、家族からのほか、ケアマネジャーからも多いそうです。

ケアマネジャーから、転倒リスクの高そうな利用者にサービス利用を勧め、中には、ケアマネジャー自ら「協力者」となるケースもあるのだとか。「協力者」になっていないケースでも、緊急通報があった際には、安心サポートセンターから親族やケアマネジャーに状況報告が行われ

### ◆フィリップス緊急通報サービス

フィリップス・レスピロニクス合同会社  
<http://www.hmservice.philips.co.jp/>  
 問合せ（フリーダイヤル）0120-504-840

#### ■加入登録料

1,905円（税抜）

#### ■緊急通報サービス基本セット（レンタル）

3,790円（税抜）／月（通信機本体1台、  
 24時間緊急通報対応、ペンダント1個）

る（事前の登録が必要）ので、利用者の状況を身近な人達で共有することができ

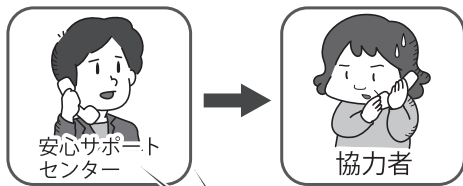
ます。

「転倒を経験されると、『また転ぶのでは』という不安感から、居室内でも、なるべく動かないようにされるケースがあります。そうすると、悪循環で、ますます筋力が低下してしま

います。弊社のサービスをご利用いただくことで、安心して日常生活を送っていただければと願っています。もし転倒しても、早く発見し治療することで、早期回復につなげていただければ、ケースもあると思います」と担当者。

事故を完全に予防することはできませんが、いざというときのリスクを軽減できる可能性があります。

\* \*



高齢者の声を取材していると、「こける」不安はもろろんのこと、「入浴中に具合が悪くなること」を恐れているケースが多いことが分かります。

転倒を検知して自動で通報されるということは、たとえ意識がなくても、声を出せなくても、情報がコールセンターに届くということになります。親世代の不安感を軽減すると同時に、離れて暮らす子にとっても安心できるシステムだと思いました。

絵・いしだみな / 働カトウプロ